深刻な問題が起こることがよくあります。意志の強い兄は絶えず罰を受け、おどされ、説教されますが、あどけないブリっ子の弟は、ちやほやされて育ちます。性格がちがうためにライバルになって、一生いがみあって過ごすかもしれません。

●穏やかな子にも必要はある

手ごわい子の生き方についてはふれましたが、次は、ひたすら両親を喜ばせようと努める、穏やかな子について考えます。実は、彼らは親にほめられ認められる必要があります。その性格は、愛され認められたいという欲求の表れです。機嫌を損じた親の一言にもびくつき、ちょっと眉をひそめられただけでも不安になる。この子は生まれつき、戦うのではなく愛し愛されるのが性に合うのです。

※　※　※　※　※　※

数年前に、こういう気のいい子の母親と話しました。幼稚園で問題がありました。気の強い子たちに毎日意地悪をされて、自分を守れない。毎日午後、お母さんが迎えに来るたびに、たたかれたりいやがらせをされていて、女の子たちまでそれに加わっていた。お母さんは息子に何度も言い聞かせました。

「もっと自分を守らなきゃ。黙っていたら、いつまでも意地悪はやまないのよ」

もっと自分を主張するよう毎日励ますものの、それがどうもできない。しかし、ついにある日、我慢できなくて、母親の言う通り勇気をふるい起こすことに決めたのです。母親の車で幼稚園に行く途中、言ったそうです。

「ママ、こんどいじめられたらさぁ、ボ、ボ、ボク、あいつらのこと、ぶんなぐってやるから。ほんのちょっとだけね」

「ほんのちょっとだけぶんなぐる」ってどうやるのか分かりませんが、この気のいい子にとっては、それが偽らざる気持ちだったのです。生き延びるために最小限の腕力以外は使いたくない。争いごとがいやなのです。これは親に教わったのではなく、生まれつきです。

●子どもの自尊心は大切にしつつ、挑戦は受けて立つ

意志の強い子を育てている親御さんに二つのことを申し上げます。

まず、罪意識を感じて自分を責める親が多いということです。懸命に努力はするのに、来る日も来る日も家庭の秩序を保とうとするだけで疲れ果てています。育児がこれほど大変とはだれも教えてくれなかったし、子どもとぶつかるのは自分がいけないからだと思い込むのです。愛情と威厳のある親になろうと自分では思っていました。パジャマを着た子どもたちにおとぎ話を読んであげたら、あとはいい子でベッドに行くものと想像していたものですから、現実と理想のちがいに苦しみます。

さらに、私の見るところ、すなおな子の親は反抗的な子を持つ親の悩みが理解できないようです。それとなく「私のような子育てをしていれば、そんな問題はなくて済んだのに」とほのめかし、親の罪意識と不安感をますます強めます。双方の親に言いたいのですが、すばらしい育児技術や親としての覚悟があっても、反抗的な子を扱うのはなま易しいことではありません。家族の中でその子が比較的従順に協力するところまでもっていくには、何年もかかるかもしれません。意志の強い子は一生涯強いままです。権威を重んじることと隣人とうまくやっていくことを教えることはできるし、教えなければならないのですが、気の強さはそのまま続きます。それは事実であり、別に悪いことではないのですから、小さいうちはパニックにならないことです。一夜にして子どもを変えようとしないでください。まごころから子どもを大切に扱いつつも、こちらの言うことには従わせます。また、争う価値のある問題をよく見極め、その点では挑戦を受けて立ち、守るべき立場を決してゆずらないでください。子どものした良いこと、親に協力してくれたことには愛情で応え、関心を示し、「何々が良かったよ」と具体的にほめてあげるのです。

意志の強い子

※ジェームス・ドブソン著「意志の強い子」（ファミリー・フォーラム・ジャパン）より抜粋
四六版342ページ　1,890円（税込）　送料210円
（ご注文は、17ページのファックス注文票、電話もしくはメールをご利用ください。代金は、商品に同封される郵便振替にて折り返しお支払いください。）

全国のリスナー・読者のみなさんから、ファミリー・フォーラム宛に、Eメールやお便りを頂いています。その一部をここで紹介いたします。

読者とリスナーのページ

Thanks!

●ハレルヤ!ファミリー・フォーラム2007冬号をお送り頂いて感謝します。興味深く読んでいます。

「人生もギャンブル?」の記事には同感しました。特にパチンコは日本特有の依存症として私たちも対応を考えていかなければと思わされています。残念ながらギャンブル依存症者とその家族からの相談はこれからも増える一方だと思いますので、情報交換など、協力し合えることがありましたら今後ともどうぞよろしくお願い致します。ファミリー・フォーラム・ジャパンの働きのためにもお祈りしています。
東京都（ティーンチャレンジ・ジャパン）
木崎智之・オリヴィアさん

●ファミリー・フオーラム・ジャパンの冊子を読みました。わたしも独身のクリスチャンですが相手になかなかめぐ会えず悩んでいたところ、内藤仁美先生のアドバイスを読みました。もし内藤先生の関係か、ファミリー・フオーラム・ジャパンで聖会やキャンプが主催される予定がありましたら、お知らせください。
埼玉県　Nさん

＊（編集部より）マガジンをお読み頂き、お便りを下さいましてありがとうございます。主の良き導きがありますようにお祈り申し上げます。

●送られてくるファミリーフレンズCDが楽しみです。内容もとてもいいと思います。友人にCDをあげてファミリーフレンズの紹介をしたいと思います。　長野県　Dさん

●教会の月例家庭セミナーで、ファミリー・フレンズCD24「しつけはなぜ必要か」を聞きました。とてもよい内容で集った婦人たちにも好評でした。このような働きに感謝しています。　愛知県　N宣教師

●先日はコールさんの尊いご奉仕をありがとうございました。夫婦について配偶者について、目が開かれた気がします。初めて教会を訪れた方も、リラックスして心開かれ、ご家族のことを話し、聞いている様子でした。それぞれ置かれている状況は異なりますが、夫婦として向かい合い、共に主に向かって歩んでいけるならと願わされます。これからも、先生のお働きが、そしてファミリー・フォーラムのお働きが祝され用いられますことを、心からお祈りします。感謝しつつ。
千葉県　S教会　婦人会

●本日のDr.コールの講演たいへん興味深く拝聴しました。短い時間に目いっぱいの内容でしたが、もっと深く、また時間に余裕があればと残念でした。この辺では人口（特に子供）が大変増えており、親も子も受験地獄に陥っています。しつけのあり方を改めて再確認させて頂きました。教会等のスモールグループでさえ、子どもの受験、合格、受験から派生するいじめなどについての話で、受験に無関係な私としてはどこに行っても浮いた状態で、何を信じて子育てをするべきかと悩みます。夫の会社ですら、子どもの受験日にほとんどの父親が会社を休む状態で、小学生に対して日本全体の価値観が失われつつあり、あぶない世の中になりつつあると実感しております。これからはファミリー・フォーラム・ジャパンも私のバイブルのひとつにして自信を持って子育てに励もうと思います。　神奈川県　Hさん

●先日アメリカ人宣教師より、ジャネット・オークの　Love comes softly　の翻訳が出ていると聞きました。今でも購入は可能でしょうか。また続編の翻訳はされているのでしょうか。私は原作、DVDともに見ましたが、とてもいい内容でしたので日本語訳をつけて伝道ツールに使えたらと願っています。
東京都　Hさん

＊（編集部より）お尋ねの本は、「そっと愛が」という題で発売しています。続巻「やくそくの愛」は、今冬発行したばかりです。ぜひご利用ください。

●ジェームス・ドブソン『苦難の時にも』を読んで
〈「福音自由」誌（2005年12月）から抜粋〉

この本はいきなり、多くの人の「なぜ?」を私に見せます。才能と信仰を与えられながら病で亡くなる若き医学生、著者の友人で働き盛りの信仰厚い4人の事故死、無差別殺人に消えた伝道団体の主幹…。『カラマーゾフの兄弟』のイワンが気を狂わせてしまうほど悩んだ世の中のむごたらしさは、現実としてここに描き出されています。求道中だった私には衝撃的でした。

その中に愛する娘を病のため4歳で失った父親の手紙がありました。亡き娘への語りかけは、いつどこで読み返しても涙をこらえられません。当事3歳の娘、誕生間もない息子を持っていた私は他人事ではありませんでした。読み進めば読み進むほど、疑問は大きくなっていきました。

クリスチャンになるとは一体どういうことなのだろう?　神はなぜこのような悲しみを放っておくのか?　なぜ、神を慕うクリスチャンの必死の祈りに答えないのか?　なぜ不法や悪を滅ぼさないのか?　もしや神はいないのではないか…。

この本は「それでも、納得いく答えが与えられなくても信じるのだ」と言い、「地上にいる間には約束は果たされず、何らかの形で虐げられるだろうが、神が約束を必ず守ってくださるのだから信じなさい」と言います。『理解できないことでも信頼せよとは無茶な話しだ。』私は苦しくなって読書を中断しました。牧師と幾度も話し合いました。果てしない作業のようでした。疑問が一つ解消されたかと思うとまた一つ浮かんできて、それをまた牧師と話し合って確認していく。しかし、その話し合いを通して、次第に自分が読み過ごした神の姿を知らされ、「もう読みたくない」と思っていた箇所すら読み返すという行為そのものの中で、私は神さまを見つけていきました。読書は再開されました。当時の日記にはこう記されています。

「私は、今、ようやく信仰の糸口を見つけた。神さまはそこにいたのだ。私のすぐ近くに」

その後の私は、もちろん多くの迷いと幻滅を経験しました。受洗後一週間目、娘が本棚の下敷きになってガラスの破片をかぶりました。半年たたぬうちに、旅行先で骨折、東海豪雨にも遭い、避難所から浸水していく我が家を眺めました。翌年には、直線を走る自分の車に対向車が突然突っ込んできました。肩の痛みで多くの趣味を諦めることになりました。その度に、「神様、なぜ…?」と祈り、悩みました。しかし、答えを得られず神を見失いそうな時にも、神様を否定する気持ちは湧いてきませんでした。逆に「なぜですか?」と祈るうちに、神様に「（それでも）あなたは私を愛しますか?」と問われるのを覚え、苦しみながらも正直になって「はい」と答える自分を見つけ出すことができました。

クリスチャンになるとはどういうことか。今なら私はこう答えられるでしょう。「それはどんな時にも神様を信じて生きていける力をいただけるということなのだ」と。
愛知県　神谷正樹さん

＊（編集部より）転載を許可していただいた「福音自由」誌と神谷さんに感謝します。

お便り募集　編集部では、皆様からのご意見やご感想をお待ちしています。
home.office@ffj.gr.jp　TEL&FAX045-933-3875